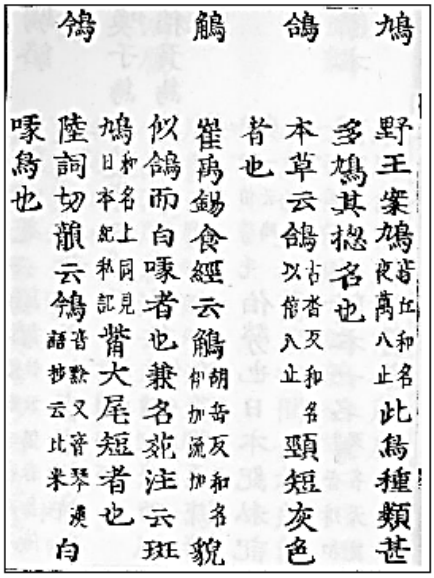
音(オン)のない漢字、訓(クン)のない漢字

河辺 岸三 (南大沢寺子屋)

漢字の読み方に音(オン)と訓(クン)があることは誰でも知っています。
では、漢字に音(オン)と訓があるのはなぜでしょうか。音(オン)は漢字が渡来したその時代の中国での発音、訓は漢字の日本での発音だと説明されたりしますが、それは少し違うだろうと思います。例えば「鳩」を「ハト」と読むのは漢字に日本の言葉(和語)を対応させたもので、漢字そのものの発音ではありません。

右のカット見てください。 これは平安時代中期に成立した漢字辞書『倭名類聚抄』の江戸初期に作られた古活字版の一頁です。ここでは「鳩・鴿・鵅・鴒」の語義を漢籍の引用で説明しています。小字で2行に割書した部分では、まずその漢字の音(オン)を、次に「和名×××」とあるのが漢字に対応する和語ですね。 ×は和語の1音を表わすための符牒、発音記号のように使われた漢字(音仮名)です。
「鳩」は音(オン)が「キュウ」、「和名 夜万八止」とありますね。「夜万八止」は「ヤマハト」(山鳩)です。 同様に、「鴿」「鵅」「鴒」は音(オン)が「コウ」「カク」「ケン・キン」、和名は「以倍八止(イヘハト)」「伊加流加(イカルガ)」「比米 (ヒメ)」と書いてある。 漢字の訓はこの和名に由来したものです。


鳩 野王案鳩音丘和名夜萬八止此爲種類甚多鳩其總名也
鴿 本草云鴿以古者反和名頸短灰色者也
鵅 崔禹錫食經云鵅胡加反和名貌似鴿而白喙者也兼名苑注云斑鳩日本紀上同見和記皆大尾短者也
鴒 陸詞切韻云鴒音零漢語抄云比米白啄烏也

ところで、日本の漢字すべてに音(オン)と訓の両方がある訳ではありません。 例えば「峠」という漢字は、どの漢和辞典にも「峠 [国字] たうげ。たむけの音便。」のように書いてあり、音(オン)についての説明は皆無です。

「国字」というのは日本で作られた漢字のことで、「峠」は山越え道の最高地点を一字で表した見事な漢字ですが、もともと「たうげ」という和語(=訓)を表すためだけに作られたこの漢字には、音(オン)はそもそも必要なかったのでしょう。 漢字の旁(ツクリ)で音(オン)を表わそうにも、「上下(ジョウゲ)」では音(オン)になりません。
もちろん「峠」は中国の辞書には載っていない漢字です。

「国字」の中には、「峠」と逆に、音(オン)があって訓のない漢字もあります。深海魚のアンコウは「鮟鱇」と書きますが、古い漢和辞典を見ると「鮟」と「鱇」は音(オン)が違うだけで、どちらの説明も「[国字] 鮟鱇は海魚の一。」とまったく同じです。 訓についての記述はなく、「鮟鱇」は「鮟」の唯一の用例として出てきます。
「鱈」や「鰯」のように、1文字で魚の特徴を連想させる漢字を作るのが難しく、音を表すだけの魚偏の漢字を作ったものでしょう。ただ、その後の漢和辞典では、宋代の中国の辞書を根拠にあげて、「鮟」については国字扱いを止めています。

「鮟」と「鱇」は中国の辞書にも載っていますが、どちらもピンイン式の発音記号に続けて「鮟鱇を見よ」とだけ記述し、典拠の説明がありません。 これは「鮟鱇」という国字が中国に逆輸入された結果ではないかと想像されます。
なお、国字はその性格上、生活に密着した場面から生み出されたと考えるのが妥当です。 そこで、食生活に関係ありそうな部首を小型の漢和辞典で確かめると、国字は魚部に断然多く、鳥部にぽつぽつ、ケモノ偏には皆無で、肉食がタブーだった日本人の食生活を文字の面から眺めるような気がします。

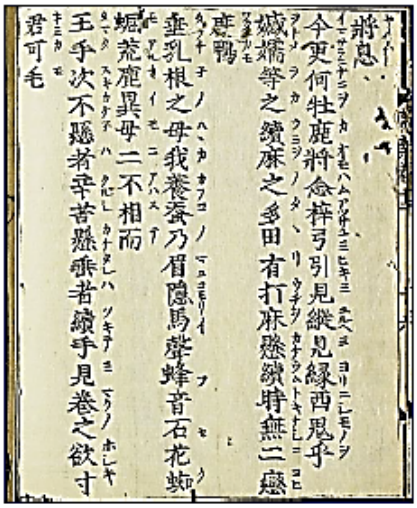
万葉集の「音(おと)」と「訓(よ)み」

河辺 岸三（南大沢寺子屋）

文字を持たなかった日本人が最初に手にした文字は中国からもたらされた「漢字」でした。 現存する日本最古の歴史書と歌集である『古事記』も『万葉集』も、使われている文字はすべて「漢字」で、歌以外の文章は漢文（当時の中国語）で書かれています。

しかし、歌謡や和歌は「和語」で歌われていますから、漢文で書き表すことはとても難しい。そこで、『古事記』の歌謡では、漢字をすべて日本語の1音節に相当する‘意味を持たない表音文字’として使いました。 例えば「ハシケヤシ」（感嘆詞「ああ！」）は「波斯祁夜斯」と書いてあります。 こういう漢字は「音仮名（オンガナ）」と呼ばれています。『万葉集』では、「早敷屋師/早布屋師/愛八師/愛也思/…」等々、「ハシキヤシ」をいろいろに表記しています。「屋師/八師/也思」が音仮名ですね。全部を音仮名にした「波之吉也思」もあります。

音仮名は、いわゆる「万葉仮名」のうち「借音」と呼ばれるものですが、一首全体が音仮名で書かれているのは防人（さきもり）の歌だけで、それは『万葉集』4516 首のごくごく一部に過ぎません。



『万葉集』の和歌表記はじつに多彩です。こんな歌さえあります。

「垂乳根之 母我養蚕乃 眉隠 馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿 異母二不相而」

（たらちねの 母が飼ふ蚕の 繭隠り いぶせくもあるか 妹に逢はずて）

「馬聲(イ←イイン) 蜂音(ブ←フンブン) 石花(セ) 蜘蛛(クモ) 荒鹿(アルカ)」

のような表記を「戯書」と言いますが、こうした多種多様な表記法は（万葉時代には謎々遊びのように楽しまれたのでしょうが）後の人びとをさんざん悩ませてきました。 今もって原文の訓みに諸説あったり、訓み方そのものが分らない語句さえいくつか残っています。

右のカットは『寛永版本万葉集』（早大図書館蔵）の一頁ですが、漢字表記の原文と、後世の人の訓み（カタカナ）を比較してみて下さい。

（編集部付記：「ハシケヤシ」と「ハシキヤシ」は同じ。「愛しきやし」 大辞林より）

会員の声

明官(みょうかん) 富久雄(とくお)（南大沢寺子屋）

先日学習者から受けた質問から・・・

「富士山にもう一回登りたい」と「富士山にもう一度登りたい」はどう違うのですか。

答え 二つは同じような意味ですが、とてもよかったので、機会があればぜひ登りたいときは「回」を、前回は体力不足で迷惑をかけたので、無理かもしれない。でも登りたいときは「度」を使います。

まとめ 富士登山実現の可能性が高いときは「回」を、可能性が低いときには「度」を使うのです。

検証 助数詞「回」と「度」について

A:「二回あることは三回ある」　B:「二度あることは三度ある」

諺として昔からBが使われていることもありますが、Aには少し違和感があります。

C:「第97回 全国高校野球選手権大会」　D:「第97度 全国高校野球選手権大会」

ここに至っては、Dの「第97度」って何だかおかしな表現になります。

即ち、「回」は、めぐる、かえる、の意味があり、同じ出来事がまた起こりうるということです。

一方、「度」は 重なる、わたる、という意味があり、繰り返しが予想できない出来事です。

以上、前述のAに違和感があるのは、三回起きるのは当たり前で、一方のBはもう起きないと思っていても、繰り返しがあるかもしれない。油断せずに注意しようという教訓も入っているのです。

結論 「回」は「また繰り返す」という意味で、次にまた起こりうることを数え、「度」には繰り返すという意味はなく、「次いつ起こるか分からない」、「これきりになるかもしれない」と思われることを数えるのです。

参考文献:『数え方でみがく日本語』（ちくまプリマー新書）